

教育

絵を見て磨く「語る力」

一枚の絵を、ただ見つめ、考え、語り合う。そんな「対話型鑑賞教育」(VTS)が学校の図工や美術の授業で広がりつつある。

広がる「対話型鑑賞」

島根県の出雲市立河南中学校。教室のスクリーンに、ゴッホの「靴」が映し出された。「じっくり見てください。何が見えますか?」

「靴!」「はい。靴がありますね」。春日美由紀教諭(51)が言い換えると、1年生たちから笑いが上がった。

教師は聞き役に

一人が手を挙げていう。「ぼろい。ずっと使っている気がする」

「ぼろい。どこからどう思うの?」

「つま先の方の色がうすいから」

「なるほど、この辺り?」生徒たちは、作者や作品の題名、年代、背景といった情報を一切知らされていない。ただ、作品から想像を膨らませ、語り合ううち、靴を履いていた人物に話が広がった。

「お金のない人が使っていた靴だと思う」「亡くなったおじいさんが使っていた形見の靴で、おばあさんが持っているものじゃないか」

「片方ずつ違う靴だ」という子も出てきた。

春日教諭は6年前からVTSに取り組み。「対話を通じて読み取る力が深まり、視点も多様になる。友達の見聞に耳を傾けることで、『あの子って結構すごい』『自分の考えもまんざらでもない』と思え、教科を超えた効果もある」と話す。今年度は、ベン・シャーン(19)の「解放」や地元作家の作品も用い、計20時間程度の授業をした。

対話型鑑賞の手法は、美術館などでは10年ほど前から始まっている。学校では

観察力、論理的思考力も

VTSの普及に取り組む福のり子・京都造形芸術大アート・コミュニケーション研究センター長の話 教科書に載っている絵の背景説明をしてテストで知識を確認したり、美術館で学芸員の説明を聞いて感想文を書いたり、という鑑賞の授業で、「美術って楽しい」と思えますか?

VTSは、自分で答えを導き出す鑑賞教育です。子どもたちも作品を見るのが楽しくなるし、観察力や洞察力、論理的思考力もつきます。欧米やアジアの学校現場では、以前から広がっています。図工や美術でなく、国語や数学の先生にも養成講座を始めましたが、驚くほど反響がありました。日本でも「美術を見る時は静かに」でなく、「発見したことは何でも言いたい」に変えていく時代ではないでしょうか。

「答えがなくていいのか」「作品の背景を教えなくていいのか」といった意見もあり、導入にちゅうちよする学校が多かったが、子どもたちのコミュニケーション力の低下や、新しい学習指導要領で「言語活動」が重視されたことを背景に、徐々に広がってきた。

他教科にも応用

京都造形芸術大で今年度、VTSの講座が開かれた。初回の受講者約150人のうち半数以上が小中学校などの教師だった。図工・美術だけでなく、国語や



教師は子どもの意見の「聞き役」だ
＝島根県出雲市の市立河南中学校

社会の教師も。2、3回目の募集もすぐ満員になった。今月27日、4月1日にも同大学で講座がある。

VTSの基本は、教師のような進行役が私見を述べず、鑑賞者の発言を言い換えて繰り返す。次の発言へ結びつけること。ほかの教科の授業にも通じる方法だ。講座に参加した京都市の小学校の男性教諭(35)は「社会科でもグラフを読む時など、同じように使える。いろんな教科で対話能力を持たせることが今の時代は大切だと思います」。他の中学教諭は「授業中、自分の言葉をうまく言えずにキレる子どもも少なくないのではないか」と話す。

VTSを普及させるために、ニューヨークから来日したフィリップ・ヤノウィッチ・元ニューヨーク近代美術館教育部長(69)は「自分の見方に自信を持って、自分の声を上げられる人間を育てることは、民主主義の基本。VTSは、人の意見に耳を傾ける訓練にもなり、美術にかかわらず重要な教育だ」と話した。(宮坂麻子)